

## 「ナルドの香油」

(マルコ14:1～11)

挽地茂男

2019.4.7 日本基督教団千歳丘教会礼拝

本日の聖書の箇所は、受難物語の中でも愛されている物語の一つ、有名なナルドの香油の物語です。ナルドの香油は植物辞典で調べますと、(1)植物のナルド(英名:スパイクナード Spikenard)から精製される香油です。植物としてのナルドはオミナエシ科に属する高さ15～30cmの小型の多年草で、花は根生する花茎の頂端に多数が集まり、淡紅色。中東の高地やヒマラヤからチベットに分布、太い根茎は葉柄の基部でおおわれていて、掘り取られ Jatamansi または Narodus Root の名称で薬用にされます(世界有用植物事典より)。(2)香油としてのナルド・

オイルの効能は、アレルギーを起こした肌や肌荒れ、炎症、傷口、乾燥肌などの症状に用いることができるそう



ナルド(スパイクナード)の花

です。ナルド(スパイクナード)には、肌の層を元に戻す働きがあるためだそうです。中東からインドを支配したムガル帝国の王妃は肌の若返りに用い、



ナルドの香油(10ml 4095 円[税 195 円])

ローマの調香師

〔Perfumer〕たち

も使いました。

また毛髪や歯の

トラブルにも使

われる。心臓と

そのまわりの血行をよくするほ

か、熱があるときには熱さましに

効果があるそうです。ナルド(ス

パイクナード)の精油は、神経へ

の鎮静効果を持つ最も良いオイル

の一つであって、神経およびバラ

ンスの崩れた心をコントロールす

るのを助けます。精神的には、気

持ちをスピリチュアルな方向に向

けることを助け、寛容さ、深いイ

ンナーピース(内的平和)へと導

く、とされています。

ヨハネ12章3-5節にも、このナ

ルドの香油の物語と類似する並行



記事が記されています。

12:3その時、マリアが純粹で非常に高価なナルドの香油を1リトラ持ってきて、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。12:4 弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。12:5 「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」



1リトラ（326g）が三百デナリオン、約一年間働いた労賃にあたります。1グラムが約1デナリオン（約1万円）ということになります〔現代・日本での市場価格10cc=4,095円〕。ヨハネ福音書の記事では、香油を注いだのがラザロの姉妹マリアで、香油の量が1リトラであったこと、香油がイエスの足に塗られたこと、香油の香りが部屋いっぱいに広がったことなど詳細化されて報告されています。いずれにせよ、どちらも同じようにナルドの香り立つような薫り高い物語が描かれています。

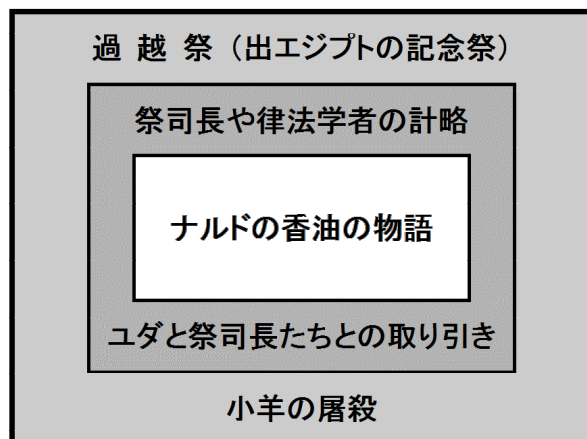
実は、このナルドの薫り高い物語を、死の臭い、あるいは死の気配が取り囲んでいることに注意したいと思います。本日の聖書箇所1-2節はこのように語っています。

14:1さて、過越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、なんとか計略を用いてイエスを捕らえて殺そうと考えていた。14:2彼らは、「民衆が騒ぎだすといけなから、祭りの間はやめておこう」と言っていた。

時は、最後の晩餐（過越祭・除酵祭）の二日前となっています。今日の聖書箇所に出てくる食事は最後の晩餐の二日前の食事ですから、過越祭の食事ではないのですが、過越祭にむけて、エルサレムの街や家庭の中にも過越祭のにぎやいだ雰囲気が増していったと思われます。過越祭はユダヤのお正月に当たる祭ですから、「もう幾つ寝るとお正月」という歌にもられた祝いの日に向かうような期待感が、ここにもあったと考えられます。

しかし祭りの賑わいに紛れるようにして、ユダヤ人の宗教指導者たちはイエスの暗殺を画策してい

ました。そしてこのナルドの香油の物語のすぐ後にも、再度イエス暗殺の計画が記されています。ユダが動き出します。10-11節。14:10 十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。14:11 彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そこでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかとねらっていた。



つまりこの物語は11節までを含めて見てみると、次のような物語構造（枠構造）を持っているのです。①〔祭司長たちや律法学者たちの〕暗殺の策謀（v.1-2）、②ナルドの香油の物語（v.3-9）、③暗殺の取引〔機会をねらう祭司長たちとユダ〕（v.10-11）という構造です。ナルドの香油の物語が、

暗殺計画の記事に囲まれているのです。1節では、祭司長たちや律法学者たちは「なんとか計略を用いて（ἐν δόλῳ）、イエスを捕らえて殺そうと考えていた」と語られます。この「計略」という言葉（δόλος）はもともと、魚を釣るための餌〔a bait（餌） for fish ⇒ *deceit, treachery, fraud.*〕という言葉です。彼らは何とかしてイエスをつり上げようとしていたのです。そしてまずはイエスの側近とも言える12弟子の一人が引っかかってきたのです。

ナルドの香油の物語は、前後を「暗殺」計画を枠として囲まれ、祭（過越祭・除酵祭）への高まりを背景に進行します。「民衆が騒ぎだすといけなから、祭りの間はやめておこう」（v.2）という表現は、ユダヤの人々にとってこの祭りが高揚感を強くかき立てる特別な祭であることを示しています。おりしもエルサレム神殿の周りには屠られる過越の小羊が集められている時期でした。過越祭で屠られる小羊の頭数は2万頭にも達することがあり、エルサレムの町の至るところに小羊の声が響いていたのです。この物語全体は、

## 暗殺の緊迫感と祭のエネルギー

（過越祭・除酵祭）に覆われているのです。つまり。イエス暗殺の〈策謀〉と過越の小羊の〈屠殺〉がこの物語の背景です。そしてナルドの香油の物語は、この背景を背にして、主イエスに油を注いだ**女の行動の正しさを際立たせる**薫り高い物語として語られているのです。



スレバラン「神の小羊」

マルコ福音書では、（ヨハネ福音書とは違って）名前の記されていない一人の女がイエスに油を注ぎます。こう記されています。

14:3 イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。

場面は食事の席です。古代世界において食事は、きわめて重要な

社会的意味を持っておりました。特に社会的有力者の主催する食事、食宴はそうでした。すなわち



古代の食事は、社会的有力者とその食卓に与る者たちの、交際と社会（力関係、取り引き関係）の縮図を意味していました。古代のラテン語で〈パトローヌス〉と〈クリエンテース〉という言葉がその関係を表しています。現代のパトロンとクライアントという言葉ですが、〈パトローヌス〉（パトロン）は現代では「後援者、支援者、賛助者、奨励者、または特権階級や財政支援をする人」を言いますが、歴史的な用語としては「保護者」と訳されます。一方〈クリエンテース〉（クライアント）は現代では「依頼人・顧客」と訳されたり「心理療法でカウンセリングを受ける人、来談者」と訳されて使われていますが、古代では「被保護者」です。つまり〈パトローヌス〉と〈クリエンテース〉という言葉

は、〈保護者〉と〈被保護者〉という社会的な庇護関係を表します。社会的な有力者である〈パトローヌス〉はどのような形でその力（有力者ぶり）を表すかということ、もちろん政治や経済のレベルでもその力を発揮するのですが、生活のレベルでは食事の席なのです。〈パトローヌス〉はその経済力を背景に、大きな食事の席を設けます。その食宴に招かれるか否かは、その人の社会的な位置を示すことになります。ですから〈クリエンテース〉とは具体的には、「有力者の食事に与る客」「食客」のことなのです。そしてまた〈クリエンテース〉が〈パトローヌス〉の催す食事の席のどこに座るかは、近くか遠くかは、その人の社会的な力を表すものとなります。古代ローマのこのような食卓の交わりは、当時の経済的な格差、社会的階層における縦の関係、政治的立場の違いを表す見取り図としての意味をもっていたのです。

このような食卓の理解を、ローマ帝国を駆け巡ったパウロの宣教活動のみならず、主イエスの時代にも適用できると多くの新約学者が考えております。主イエスはフ

ァリサイ派の人々を偽善者と非難するとき、彼らは「広場で挨拶されたり、食事の席で上座に座るのが好きで…」と非難して、当時から食事の席に上下のあることを示しています。そのような上下が問題となるような食事に対して主



イエスの食事の席には罪人や取税人までいます。そこでは〈**貧しいものは幸いです、飢えているものは幸いです**〉とまで語られた方がパトロンです。つまりイエス・キリストの食事は「**開かれた食事**（共食）」、差別のない社会の縮図を示しています。イエス・キリストの宣教は、生活のレベルでは「差別のない食卓」として展開していったと考えられています。そこにおいて人々は、主イエスを通して語られる神の国、そして神と出会っていったのです。新約聖書学では、これが当時の社会にあっては、既成の社会的な構造を脅かすものになったと考えられています。初期のキリスト教は、「食卓の共同体」

貧しいながらも、分かち合いと交わりの共同体として展開していったのです。わたしたちが洗礼を受けて聖餐式に預かり、聖餐式を大切にしていくということは、主イエスの十字架の御業を想起し記念しその恵みに感謝すると共に、主イエスを中心に生まれ、成長していった隔てのない交わりに生きるということをも意味しているのです。



そのような食事の席で、ナルドの薫り高い香油が主イエスの頭に注がれました。香りが部屋中に広がりました。①香りはその場の雰囲気や人の気持ちを変えてしまうことがあります。主イエスのおられたその部屋は、その香りと共に落ち着きと平和に満たされたのかもしれませんが。また十字架を目前にした主イエスに、霊的な（スピリチュアルな）高揚感と、深い内面的な平和を与えたかも知れません。受難にむかっていく主イエスの決意を香りが柔らかく支えたかも知れません。

ところで油を頭に注ぐという行

為、「油注ぎ」は、元来の王の即位儀礼でさなれた行為であります。「油注がれた者」はメシア（ギリシア語に訳すとキリスト）ですが、旧約聖書ではまずは王様を指して使われます。国難を（軍事的、政治的に）救う王こそ、国民の救い主〈メシア〉であったからです。

（イギリスの戴冠式は、ロンドンのウェストミンスター寺院で行われる。まず、カンタベリー大主教が祈祷し、国王は宣誓して「スクーンの石」がはめ込まれた戴冠式の椅子「キング・エドワード・チェアー」（エドワード懺悔王の椅子、King Edward's Chair）に着く。大主教は、国王の頭と胸、両手の手のひらに聖油を注ぐ。



エリザベス女王(即位時)

次に、国王は絹の法衣をまとい、宝剣と王笏、王杖、指輪、手袋などを授けられ、大主教の手により王冠をかぶせられる。国王は椅子に戻り、列席の貴族たちの祝辞を受ける。その後、国王の配偶者も宝冠（coronet）を受ける。）新約聖書に出てくる〈ダビデの子〉（10:47, 11:10）というメシア称号は、この系列のメシア称号なのです。しかし主イエスは「前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた」（V. 8）と、彼女の行為を即位の儀礼ではなく、埋葬の準備〔亡骸に塗油する行為〕として評価します。これは十字架の死を前提としていることは明らかです。即位なので

しょうか、埋葬なのでしょうか。両方です。主イエスは十字架に即位するのです。主イエスは「**十字架へと即位するキリスト**」なのです。ここでは、王に象徴される〈力が受難に交代〉します。力が人を救うものでないことを示すのです。言い換えれば、犠牲的な愛こそ力だと言っているのです。**十字架につけられたものを「油注がれた者」(メシア、キリスト)と理解する唯一の道は、主イエスがダビデの子(軍事的、政治的救済者)以上の存在であると理解することにあります(12:35-37, 15:39)。**



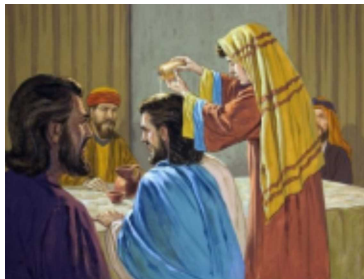
いずれにせよ、ナルドの香りが部屋中に満ちました。その香りは部屋の中にいた人々に心の安らぎをもたらしたでしょう。しかし平安と共に、すべての者が主と一つ心になっていたのではなかったのです。そこにまた、人間の功利的な考え(経済)が入り込んでくるのです。4-9節。

14:4 そこにいた人の何人かが、

憤慨して互いに言った。「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。14:5 この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。14:6 イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。14:7 貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない。14:8 この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。14:9 はっきり言っておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

香油をめぐる二つの評価が出てまいります。あるいは、香油の二つの使い方で出てまいります。ではその価値を決めるものは何でしょうか。それは主イエスとの関係によって決まっていることに注意が必要です。一方は① 香油を売却して、貧しい人々に施すという、

善行に使用すべきだと主張します。他方は、② イエスの頭に注いだのです。しかしある人々にとってそれは「無駄遣い」にしか見えなかったのです。それが「**そこにいた人の何人か**」(V.4)の人々(≡弟子たち)の評価だったのです。この態度は、つまり主イエスと主に近づく人々の間に割って入って、結果的に人々を主イエスから遠ざけるという態度は、弟子た



ちの典型的反応として福音書に出てきます(5:31, 9:38, 10:13)。10:13 イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。ここには、子どもたちを遠ざけることによって、つまりある種の区別を付けることによって主イエスへの敬意を表しているかのような「**偽りの敬虔**」の姿が出てまいります。主イエスはその区別を打ち砕いて、「子どもたちを来させなさい」とおっしゃるのです。弟子たちの見せるこの敬虔さは、何程か意味ありげに見えながら、受難が近づくときは、主イエスを捨

てていく程度の敬虔さでしかないのです。そのことは、受難物語を読めばわかります。

また弟子たちは、憤慨することによって、義憤を表明しているかのように見えます。彼らの主張は、社会的正論に見えます。しかし社会的正論の罾が暴露されます。つまり彼らは**貧しい人への配慮(宗教的善意)**を口実に**女(のイエスへの敬意)**を断罪しているのです。この婦人の行為は、「無駄遣い」として「常軌を逸した浪費、愚かしく傲慢な行為、頹廃」(モルトマン=ヴェンデル)としてしかとらえられていないのです。弟子たちは、近くにいても、見なければならぬ出来事が見えない存在として、主イエスの近くにいるのです。彼らにとっては、「油注がれた方」よりも「油」の方が大事なのです。実は、彼らはこの時点でもう、主イエスを捨てているのです。この弟子たちの愚かさを、わたしたちは笑えないでしょう。わたしたちは、あらゆることにおいてイエス・キリストよりも物を見るのです。これがキリストを捨てることのできる精神です。その意味で、わたしたちはキリストの死に関係

したのです。そしてわたしたちは依然として関係しているのです。これを知ることは神秘的(ミステリアスリィ)にわたしたちを浄化し、わたしたちの自由に基礎を与えます。わたしたちは、使徒信条の中心にイエスのぞっとするような生涯の結末を置いたのです。それは無実の死を告げる弔鐘を鳴り響かせるためです。「苦しみを受け、十字架につけられ、死んで、葬られ、陰府に下り…。」もしわたしたちが人間存在のこの暗い中心部に、わたしたちも共謀しているという事実に取り組むことに失敗するなら、わたしたちは自分たちの救いを理解しないでしょう。ただわたしたちが十字架を自分のものとするとき、単なる言い聞かせやマインドコントロールとは違うものとなるときにはじめて、真に心を浄化するものとなるのです。わたしたち人間の解放を告げる鐘の音をたゆまず響かせてきた、あの偉大なよきおとずれが、聞こえはじめるのです。

無名の女の行為に対する主イエスの評価は違いました。この「名の知れない一人の女」は、伝承史においては後代になると実名化

(マリア／マグダラのマリア) 致しますが、元来は無名の女性なのです。この無名性は大切です。(1) ガリラヤの無名の人々と共に生きた主イエス



にふさわしく無名の女が大切な役割を担っています。彼女の行動のみが、(2)十字架の死に向かって歩むイエス・キリストの招きに応答する行動だったのです。「**埋葬の準備をしてくれた**」(V.8)という、行為の真価を見定めるは、キリスト中心的な評価なのです。社会的正論が評価の基準ではないのです。彼女が捧げた「**純粹で非常に高価なナルドの香油**」(V.3)は、この女の信仰の姿勢を間接的に表現しています。そして、この香油を注いだ彼女の行為を主イエスは「**良いこと**」(V.6)をしてくれたと言います。この「**良いこと**」(καλὸν ἔργον) という用語は施しや慈善行為などの宗教的善行を意味する言葉です(cf. NIV “beatiful”

はだめ)。つまり弟子たちがこの香油を300デナリオンで売って貧しい人々に「施し」(善行)(v.5)ができたのにと彼女を咎めますが、彼女の行為こそ「善行」なのだと言っているのです。聖書における善は「善」なる方との関係によって決まるのです。善なる神と、善なるキリストとの関係によって決まることなのです。社会的評価を無視するわけではありませんが、それは決定的な基準とはなり得ないのです。そして主イエスは彼女の行為を「**できるかぎりのことをした**」(V.8)と賞讃します。

この「**できるかぎりのことをした**」という表現は大切です。コリントの信徒への手紙13章3節は次のように語ります。「**13:3 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。**」つまり主イエスは、彼女の行為を愛の表現として理解するのです。それは小さな娘が母親に誕生日のプレゼントをくれたときに、娘のお金の出所は、自分



の財布であることを知っていても、母親は娘に、適当に表面上の感謝を伝えて、どうせ私のお金なんだから、としらけてしまいはいないのです。そのプレゼントを買ったお金が自分の財布から出ていることなど、まるで忘れてしまったかのように喜ぶのです。そのプレゼントには、娘の心が宿っているからです。もっと言えば娘の愛が宿っているからです。

そして主イエスは、この女性の行為は「**世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう**」と語られます。ナルドの香りは一人の無名の女性が、無名であることによって、キリストの香りとして世界に届くのです。ここでは彼女の無名性は普遍性にかわります。

教会は名前のつかない様々な奉仕によって成り立っているところです。しかし神はそれをご存じなのです。教会の交わりが豊かにされるために、わたしたちも、



可能性を尽くして仕えてまいりましょう。そしてこの受難節の時、主イエスの十字架における尊い犠牲によって成就された救いを感謝しつつ、新しい一週間を歩み出しましょう。

2019.4.7 日本基督教団千歳丘教会礼拝



14:1 さて、過越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、なんとか計略を用いてイエスを捕らえて殺そうと考えていた。

14:2 彼らは、「民衆が騒ぎだすといけないから、祭りの間はやめておこう」と言っていた。

14:3 イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家にいて、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。

14:4 そこにいた人の何人かが、憤慨して互いに言った。「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。

14:5 この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。

14:6 イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。

14:7 貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しか

し、わたしはいつも一緒にいるわけではない。

14:8 この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。

14:9 はっきり言うておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

14:10 十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。

14:11 彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そこでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかとねらっていた。

14·1 Ὡν δὲ τὸ πάσχα καὶ τὰ ἄζυμα μετὰ δύο ἡμέρας. καὶ ἐζήτουν οἱ ἀρχιερεῖς καὶ οἱ γραμματεῖς πῶς αὐτὸν ἐν δόλῳ κρατήσαντες ἀποκτείνωσιν·

14·2 ἔλεγον γάρ, Μὴ ἐν τῇ ἑορτῇ, μήποτε ἔσται θόρυβος τοῦ λαοῦ.

14·3 Καὶ ὄντος αὐτοῦ ἐν Βηθανίᾳ ἐν τῇ οἰκίᾳ Σίμωνος τοῦ λεπροῦ, κατακειμένου αὐτοῦ ἦν γυνὴ ἔχουσα ἀλάβαστρον μύρου νάρδου πιστικῆς πολυτελοῦς, συντρίψασα τὴν ἀλάβαστρον κατέχεεν αὐτοῦ τῆς κεφαλῆς.

14·4 ἦσαν δέ τινες ἀγανακτοῦντες πρὸς ἑαυτούς, Εἰς τί ἡ ἀπώλεια αὕτη τοῦ μύρου γέγονεν;

14·5 ἡδύνατο γὰρ τοῦτο τὸ μύρον πραθῆναι ἐπάνω δηναρίων τριακοσίων καὶ δοθῆναι τοῖς πτωχοῖς· καὶ ἐνεβριμῶντο αὐτῇ.

14·6 ὁ δὲ Ἰησοῦς εἶπεν, Ὑποφέρετε αὐτήν· τί αὐτῇ κόπους παρέχετε; καλὸν ἔργον ἡργάσατο ἐν ἐμοί.

14·7 πάντοτε γὰρ τοὺς πτωχοὺς ἔχετε μεθ' ἑαυτῶν καὶ ὅταν θέλητε δύνασθε αὐτοῖς εὖ ποιῆσαι, ἐμὲ δὲ οὐ πάντοτε ἔχετε.

14·8 ὃ ἔσχεν ἐποίησεν· προέλαβεν μυρίσαι τὸ σῶμά μου εἰς τὸν

ἐνταφιασμόν.

14·9 ἀμὴν δὲ λέγω ὑμῖν, ὅπου ἐὰν κηρυχθῇ τὸ εὐαγγέλιον εἰς ὅλον τὸν κόσμον, καὶ ὃ ἐποίησεν αὕτη λαληθήσεται εἰς μνημόσυνον αὐτῆς.

14·10 Καὶ Ἰούδας Ἰσκαριώθ ὁ εἷς τῶν δώδεκα ἀπῆλθεν πρὸς τοὺς ἀρχιερεῖς ἵνα αὐτὸν παραδοῖ αὐτοῖς.

14·11 οἱ δὲ ἀκούσαντες ἐχάρησαν καὶ ἐπηγγείλαντο αὐτῷ ἀργύριον δοῦναι. καὶ ἐζήτει πῶς αὐτὸν εὐκαίρως παραδοῖ.